HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	タタール海峡西岸地域初の考古学発掘調査
Author(s)	ヂヤコフ, V.; Dyakov, Vladimilr; 堀越, しげ子
Description	堀越しげ子訳
Relation	オホーツク文化形成期の諸問題 = Problems on the formative stage of the Okhotsk culture
Citation	北海道大学総合博物館研究報告, 1, 45-51
Issue Date	2003-03-31
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/38399
Type	departmental bulletin paper
File Information	no1_p45-51.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

タタール海峡西岸地域初の考古学発掘調査

Ｖ．ヂヤコフ（堀越しげ子 訳）

The First Archaeologiclal Excavations on Western Coast of The Tatar Channel

DYAKOV Vladimilr

From the steep slopes of mountainous country Sichote-Alin at the edge of the Tatar channel from the west, flow three rather large rivers the Nelma, the Botchi, and the Koppi. The Samarga, found south of these, further to the north. In these are located the places of conventional native settlements. In 1978 an archeological expedition worked here for the first time. Under the guidance of the author, the archeological sites referring to the 1st millenium BC up to the 1st millennium AD were excavated on the banks and near the estuaries of those rivers. The most interesting excavation was made on the river Koppi, near the estuary, in 4 places. Three of them are on the right bank (Koppi I,II,III) and one, on the left bank (Koppi IV).

On the spot indicated Koppi I,13m^2 is dug out. Remnants of a ground-level building, ceramics, a small number of articles from flint and other stones, and drilling samples of tubular bones are found. The ceramics demonstrate definite similarity to the Uril culture of Lower Amur. Preliminary dating is the Iron Age, probably, last third of the 1st millennium BC. up to AD. The spot Koppi II is investigated by a trench and pit hole with floor space of 22m^2. Here are found features of three periods of settlements. But only two are traced clearly. The earlier period dates back to the bronze age (1st millennium BC), from which deepened parts of two dwellings remain. The later period dates back to the Moche culture (the 2nd half of the 1st millennium AD), lying above ancient foundation pits. Some pieces of ceramics are referred to the third cultural horizon, probably more ancient than the layer with dwellings. The spot Koppi III about 30m^2 is dug out here. The remnants of buildings, washed away by the river, and the artifacts (ceramic pots; roughly cut, retouched, and polished stone objects, a bronze ring with channeled surface) were excavated. On a tentative estimation, III or IV cultural-chronological complexes are represented here. The spot Koppi IV about 10 m^2 of sand dune were dug out. At the remnants of Moche culture dwelling, ceramic pieces, bones, and iron articles were found. Results of the research have shown a considerable scientific value at opened sites for a solution to the many problems forming the ethnic cultural situation on bordering territories, but have not answered the problems which arose. It is necessary to conduct broader excavation not only on the Koppi, but also on the seacoast and in the valleys of the other rivers above-mentioned.

1974 年サマルガ川での最初の考古学的発見の後で，私は間宮海峡西岸のサマルガ河口以北に人類文化の跡を探そうと努力した。この地では専門家による考古学調査はなされていなかったが，トゥムニン川の谷，ソビエツカヤガバニ市の地域やコッピ川河口から偶然見付けられた古代の人工遺物がよく知られていた。

1978 年このタイガの過疎地域に向かう支度をしながら私が自分の課題としたのは，古代の人々の遺跡を見つけ，それらを残した住民がどのようなテリトリーに関わったか情報を得ることであった。私の指揮下にこの調査を行う時間はごく限られて

Correspondence to: Chair of Humanities, Vladivostok Branch of Russian Academy of Customs, Kirova st.,52,Vladivostok, 690068, Russia.
E-mail vid@hotbox.ru

おり，予算も充分ではなかったので，調査計画は全て時間的予算的制約を受けたものとなった。それゆえ我々が得た結果をもとに若干の質問に答えることはできても，この広範なテリトリーの持つ考古学的豊かさと可能性を全て明らかにすることは不可能である。

ソビエツカヤガバニ市近辺の短時間のエクスカーションの後，5名からなる我が遠征隊は小さな飛行機で60km南の町インノケンティエフカに運ばれた。ここから，私が発掘を計画したコッピ川までは7kmである。

しかし古代の遺跡が我々によって明らかにされた最初の場所はプチャ川右岸であり，河口から0.15km，インノケンティエフカのテリトリーでのことであった。この地点は水面との比高わずか1.5mだった。文化層は約1000㎡の面積を持ち，厚さ0.1-0.15m，沖積層のすぐ上に形成されていること，芝生の下にあり，多くの場所で村の現在の住民によって破損あるいは破壊されていることが明らかになった。

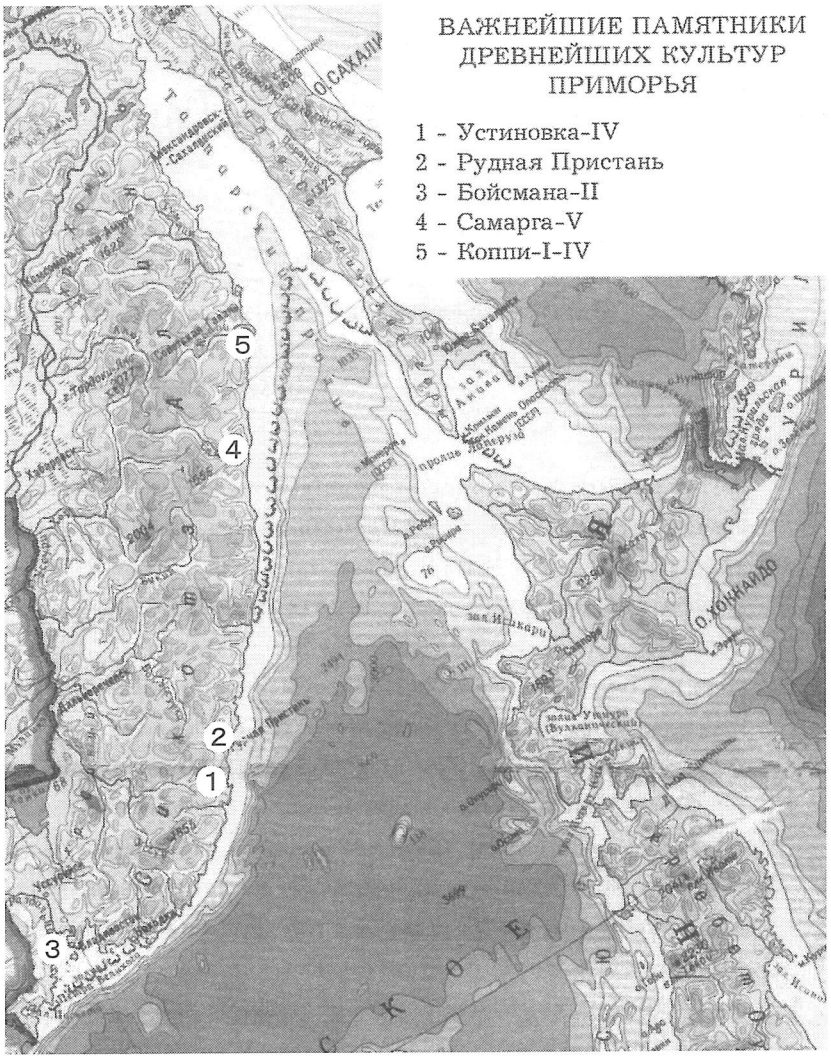


図1　沿海地方主要遺跡

出土物（石器と土器）から，これが一層の遺跡であると理解できる。平底でレリーフ装飾を持つ土器の断片，それは口縁部に飾りを持つ。縁に複数の平行線が引かれ，その1cm下（口縁部のくびれ）には等間隔に配列された貫通孔がある。石器には石核，石錘，切断具，剥片，三角形の石鏃があるが，その中で遺跡の性格を理解するために特に興味深いのは，端が片側だけ加工されている石鏃である。先端部の両面は向かい合う翼のように加工されている。このような仕上げを施された石鏃は『プロペラ型』という名称を付けられている。日本海の西岸ではそれらはリードフカ文化の遺跡にしか見られない。それ以外で，この加工技

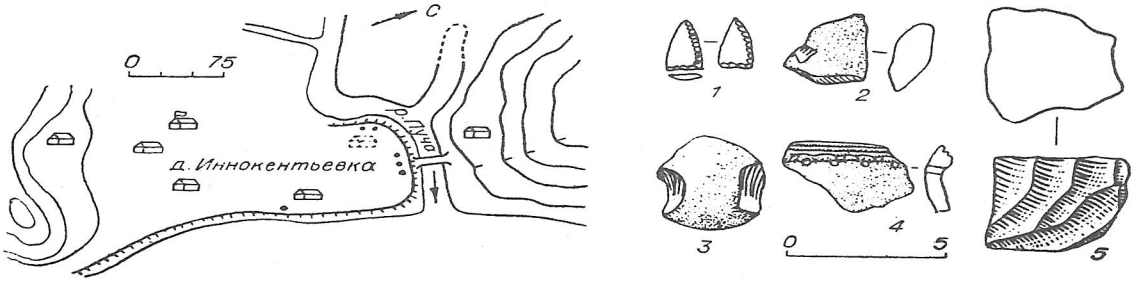


図2　インノケンティエフカ遺跡の地形図と遺物

術が広く流布しているのは南クリル諸島の択捉と国後である。

土器とコレクション全体から判断して，この遺跡は初期鉄器時代のものである。年代は推定で紀元前1000年紀後半だろう。

最初の調査を行ったあと，我々は漁師の舟でコッピ河口に本拠地を移し，間宮海峡へ流れ込む地点から約3kmの長さにわたって両岸を確かめた。右岸に我々は『島』のようなものを発見した。その北側は川が境界となり，他の方角は低地になっていた。『島』は川の水面との比高2mで，長さ約300m，幅40-50mである。遺物が高度に集中する3地点がここで確認された。我々はそれをコッピⅠ，Ⅱ，Ⅲと命名した。コッピⅣは川の反対側―左岸に位置する。

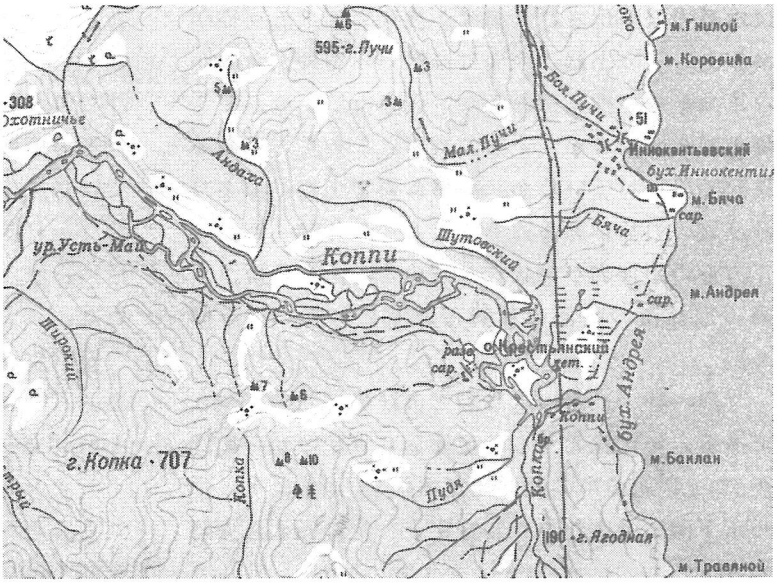


図3　コッピ遺跡とその周辺図　（Scale 1:200,000）

コッピⅠ

遺跡は島の東側に位置する。ここで試掘（1×1m）が行われ，ここから15mのところで発掘（3×4m）が行われた。発掘現場では芝土下にある薄い文化層に土器片の密集，フリントやその他の種類の硬い石で作られた比較的少量の石製品，そして食物残滓である管状骨の破片も発見された。人工遺物に加えてこの場所には大径の石が発見された。河川にある丸石および岩石の類の角張った破片である。この組み合わせからして，この場所にはかつて河岸の平地に設置された何らかの人工的な建造物があったことがわかる。

ここでは土器が何点か出土した。最も興味深いのは，広口で横から見た形がS字状の壷である。刻み目のついた帯が貼り付けられていたが，細縄による飾りに類似しており，首と胴体の間に帯を締めているように見えた。この帯状貼付文の下に

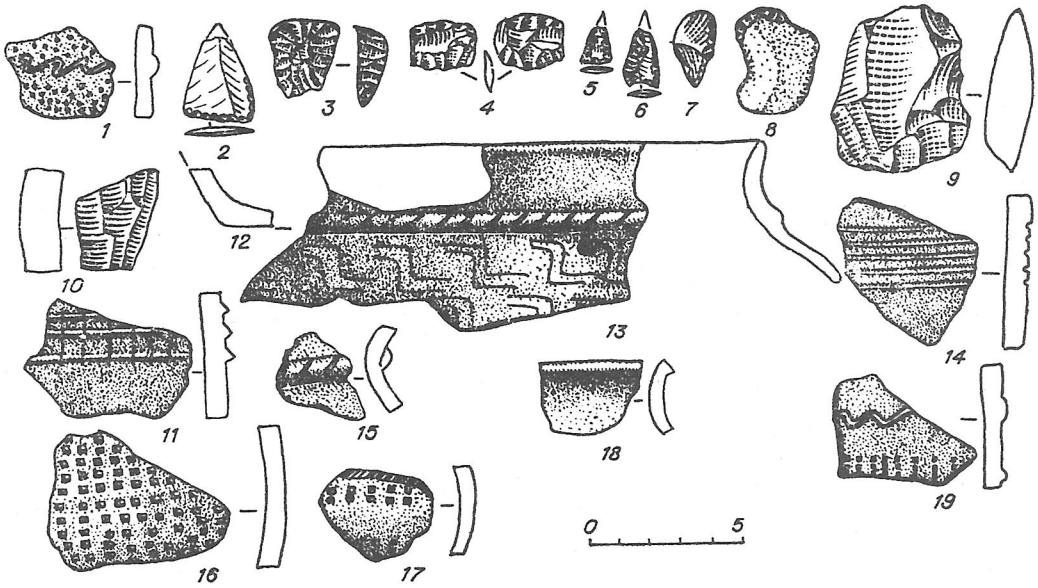


図4　コッピⅠ遺跡出土の土器・石器（1-19）

は水鳥の概略化された描写が幾列も連なる模様があった。他の土器の表面には櫛歯の型押文と細かな正方形の型押文があるが，後者は器を成形する際の叩き目である。土器の大半はこの地方にある原料で作られているが，小形の壺型土器にはより高品質の製品がある。もっともその装飾―細かな正方形の型押文が帯状に２列施されたものは，大半の地元産の土器の装飾と非常に似ている（図４）。

この一群の遺物の現段階での評価は，鉄器時代である。年代はおそらく紀元前４世紀頃から紀元後1000年紀前半の間に比定される。遺物はアムール川下流に栄えたウリル文化と一定の類似点を持つ。

コッピII

第１の遺跡から西へ100mのところにあり，低木や草の生えた河岸の平地に見える。ここで試掘が行われ，３層からなる文化層が現れたため，トレンチ（21m × 1m）が掘られた。このトレンチにより遺跡が多層構造をもつ事が裏付けられた。

トレンチの底には住居による二つの落ち込みがあった。一つはトレンチの東端に接していただけだが，もう１軒はトレンチと完全に重なっており，住居址の長軸は8mをくだらない。この竪穴床面で優勢だったのは，胴部に装飾をもたず，口縁部に模様や，リードフカ文化の土器のような小さな「襟」を伴う貼付文をもつ土器であった。土器のいくつかは口唇直下に貫通孔を持つ。

土器の他に得られたのはフリントの剥片（２次加工に伴う小形のものが優勢），４つの薄く仕上げられた鏃，ナイフ，３点の石錐，平面と断面が方形の磨製石斧の破片，臼玉３点であった。ここでは弓形の切削器や研摩のための道具，刃の擦り減った打割具，農耕文化でキビや米の刈り入れに用いられたいわゆる「石包丁」の半製品も発見された。

竪穴住居址埋土の土器は，住居から発見された土器とは異なっていた。ここでは胴部に織物による型押文と，大きな波状の貼付文等を持つ断片があった。同様の容器はサマルガＶ遺跡の川の流水でえぐられた住居址で見つけ出された。それらは紀元1000年紀後半の靺鞨文化の土器に近い。

別の層から紛れ込んだ土器片も発見された。それは竪穴住居址からのコンプレクスにも最上層の靺鞨文化にも結びつかないもので，大きな盃を思い起こさせる容器である。内湾した口縁部のふちは，小さな菱形の型押文で飾られ，その下には外側に突き出た「真珠文」（突瘤文）が形成されるように内側から突き刺した深い穴が二列ある。「真珠文」の下には８の字の押型の跡が幾列も容器を帯のように取り巻いていた。あるいは，この遺物はこの場所の最も古い（新石器時代の）層のものかもしれない（図５）。

従ってコッピII遺跡は少なくとも３つの文化層からなると推定することができる。1）新石器時代，2）初期鉄器時代（紀元前1000年紀半ばから後半），3）靺鞨時代（紀元1000年紀後半）。

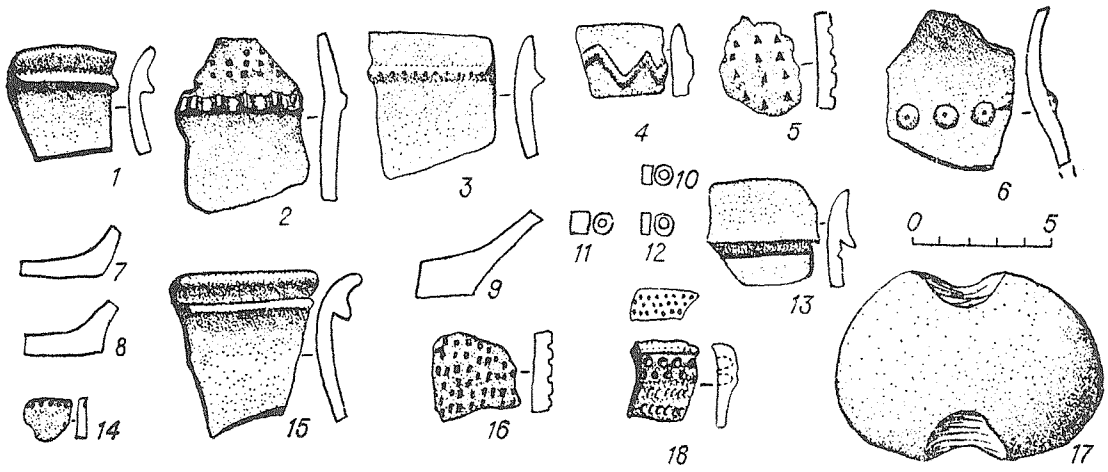


図５　コッピII遺跡の出土遺物：試掘壙上層（1-18）

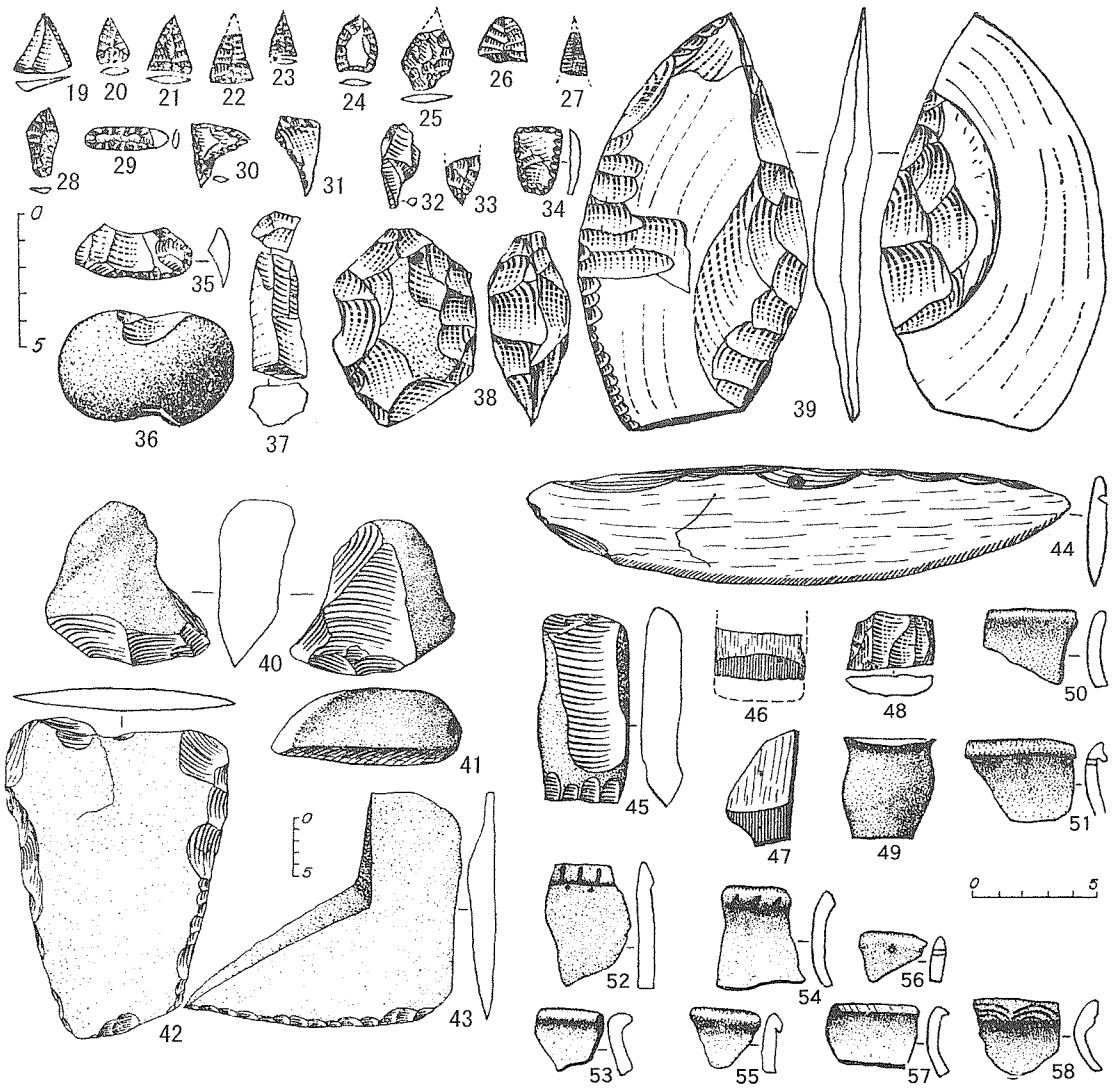


図6　コッピⅡ遺跡の出土遺物：住居址埋土（19-58）

コッピⅢ

この場所は「島」の西端にある。ここで岸は川の流水のため浸食され，遺跡の一部は破壊されている。私たちは崖に沿って長さ24m，幅1-3mの範囲を階段状に発掘した。不明確ながら古代の住居らしい遺構が部分的に確認された。

採集された遺物は一様ではない。その中には様々な時代のものがあるが，包含層が薄いため層位的な区分はできない。発見された遺物のなかには「真珠文」をもつ土器片がある。それらはコッピⅡと同様，最も古いものと我々はみなしている。縄線文や曲線文を持つ断片のいくつかは別のグループを成しているが，それらの年代は私には不明である（図8）。

幾何学模様を持つ盃は（これに類似する盃はシベリアの青銅器時代に起源を持つ），おそらく紀元前1000年紀のものである。独特なのは上部が

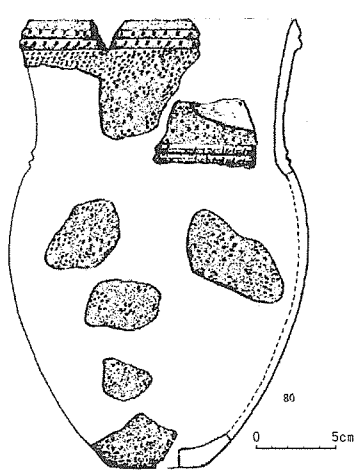


図7　コッピⅢ遺跡出土：鉄器時代の復原土器

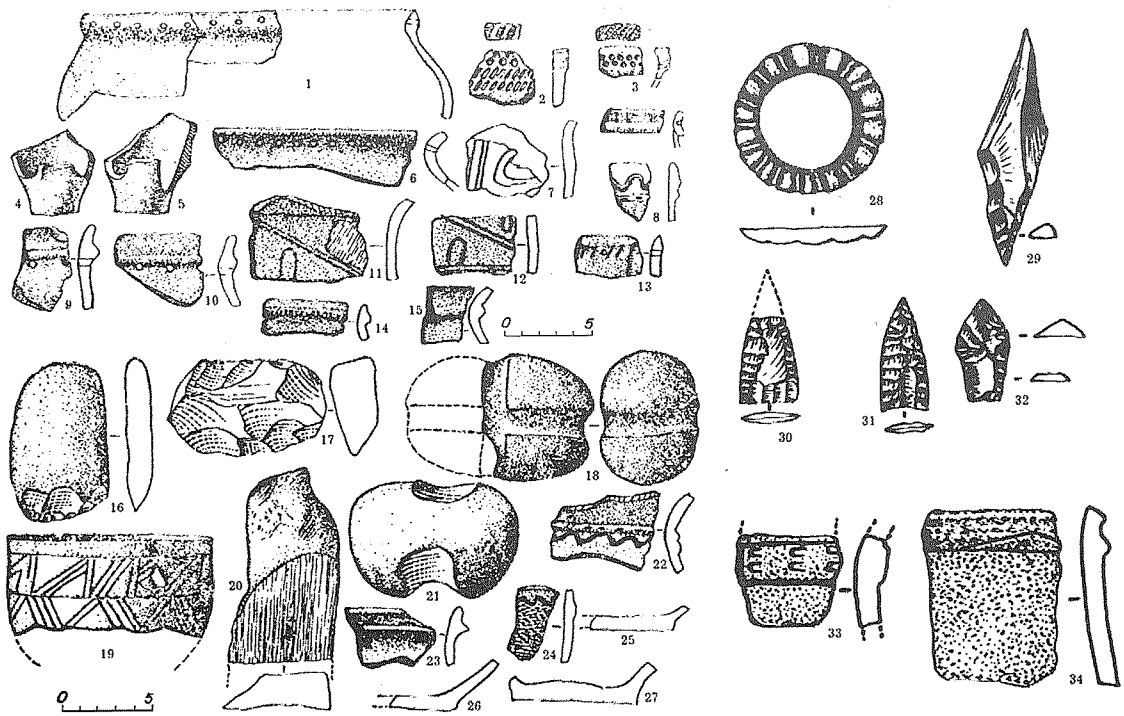


図８　コッピⅢ遺跡出土の遺物：青銅製の環（28）と土器・石器

破損した，底の小さな小形土器二つである（4，5）。それらの胴部前面は，両側に凹部を作り出したために幅広の低い「歯」のような形となっている。

リードフカ文化の製品に近い土器片も少量ある。口縁部が外反した壷形土器の破片もかなり大量にあり，口縁下にはサマルガの発見物（「ククシ型」）と同一の貫通孔が見られる。

靺鞨文化の土器も発見された。その他，興味深いのはコッピⅠ，Ⅱには存在しない土器の型式がもう一つある事だ。その土器片は口縁下1.5cmのところに波状貼付文を持ち，貼付文の下には貫通孔があけられている。

石器には，加工された石器，礫岩の錘，砥石，打割具，両面加工の石刃石器の半製品がある。銅の指輪も発見された。内側は平ら，外側は凸状で浅いレリーフが施されている。

当遺跡は現在までの資料によれば３ないし４つの文化に関する情報を含んでいる。

コッピⅣ

川の左岸，土壌の表層の破壊と風食により生じた砂山の中にある。ここでは小規模な（約10㎡）発掘が行われ，表面が現代の層に覆われた靺鞨文化（波状貼付文を持つ壷形土器の破片，管状骨片，剥離痕のある石器，鉄製品の破片）の破壊された遺跡の痕跡が発見された（図９）。

上記の調査以外に，コッピ以南，ボッチ，ルゴバヤ，ネリマといった川でも遺跡が発見された。調査の結果は，間宮海峡の西岸が多種多様な文化の人々を引き寄せていたことを示す。岸に沿って南からこの地に移動してきたのはリードフカ文化とサマルガ文化の担い手であった。ひょっとしたら，ここで彼らの融合のプロセスが続き，そこから新しい文化が生まれたのかもしれない。靺鞨文化の様々な部族は，おそらく，沿海地方（サマルガ）の方面からも，シホテ・アリン山脈を超えてアムールからも，到来した。前者は胴部に模様の無い土器を，後者は小さな正方形の押型文の土器をもたらした。今の所これは推測にすぎない。コッピの新石器時代の住民について我々はほとんど資料を持たない。異説を立てることもできないほどデータが不足している。コッピⅢに特異な形状の土器が見られたが，その中の幾つかがどのように出現したかについても同様にたくさんの問題

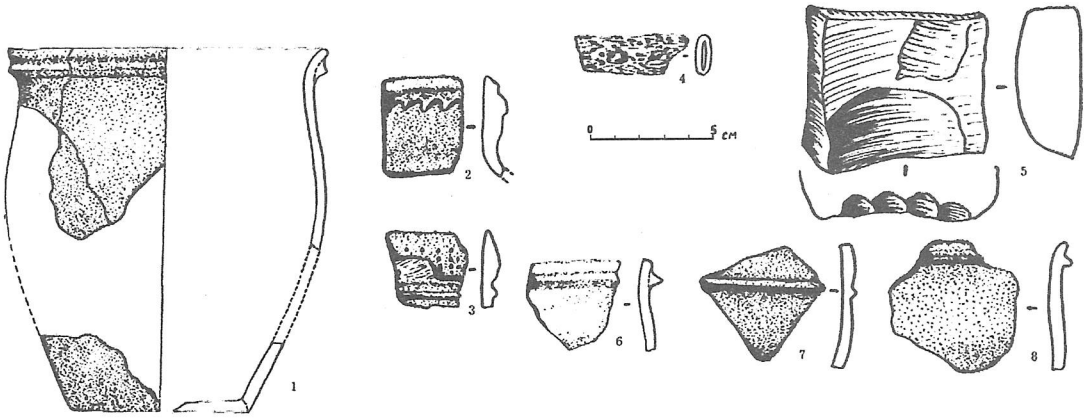
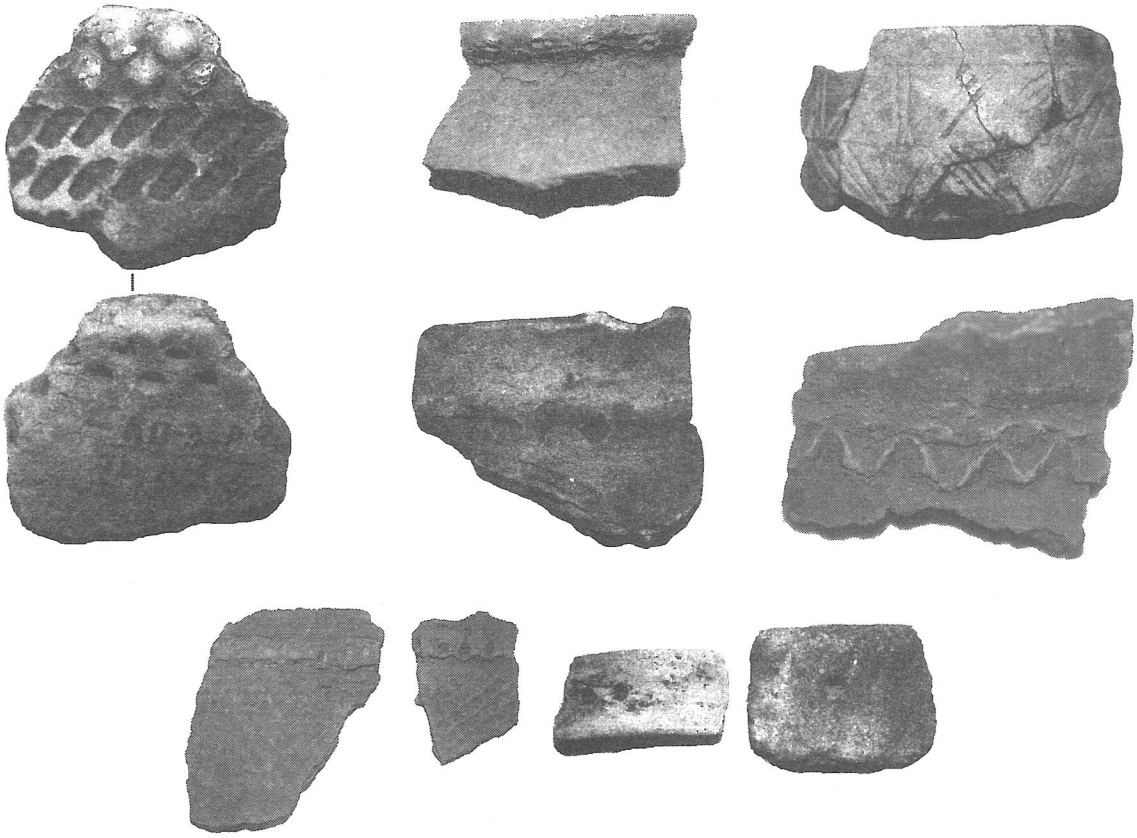


図9　コッピⅣの土器（1-3，6-8），　鉄製品（4），削器（5）

が残されている。

コッピ，サマルガ，日本海のその他の場所，間宮海峡の西岸で我々が上げた問題を解決するには，大きな区画を計画的に発掘することが必要だ。もちろん，この場合には別の発見もあるだろう。

コッピⅢ出土土器　RAN極東支部・ウラヂオストク「歴史・考古・民族学研究所」蔵

（縮尺不同）